

青年期における強迫的心性に関する一考察

—衝動性とコントロールの力動という観点から—

竹 林 奈 奈

A Study on Obsessive Personality in Adolescence
from the Viewpoint of the Dynamics of Impulsivity and Control

TAKEBAYASHI Nana

I 問 題

1. はじめに

「強迫」(Obsession)とは、精神医学的には「ひとが、その内容が無意味・非合理であり、あるいは少なくとも根拠なく支配的であり、持続的であると自ら判断する様々な意識内容を、それにも関わらず追い払うことができない状態」と定義される。この特徴が病理の中核を占める人は「強迫性障害」又は「強迫神経症」などと診断される。しかしこの強迫的な現象は分裂病やうつ病においても見られることは昔から気付かれていた。それだけでなく、健康な人々の中にも強迫的な現象あるいは心性が見られるということに注目し、強迫は一疾患単位であるだけでなく、幅広く精神病水準から健全な水準に至るまでのスペクトラム、すなわち「強迫スペクトラム」があるということを提唱したのはSalzman (1968)であり、この概念は日本にも導入されている。

さて、青年期は「ライフサイクルの中でも特に強迫的な心性が活発化する時期である」(岩崎, 1991)と言われている。それは青年期が心身の変化に伴って衝動の高まる時期であり、なおかつそのコントロールを幼児期とは違って基本的に自分一人で引き受けていかなければならないことによるのであろう。従ってこの時期に強迫的な心性が高まることは、高まる衝動性に対する防衛といった意味合いがあり、1つの発達課題としても捉えられよう。一方で、精神的な問題を抱える現代青年の病態には、強迫的な心性がベースになっているものが多いという指摘がある。この青年期の「強迫的心性」に焦点を当てて、心理学的に考察を加えることが本稿の目的である。

2. 「強迫」をめぐって

現代の青年が抱える強迫的心性を論じる前に、強迫現象をめぐり歴史を整理し、その上で本稿で用いる「強迫的心性」についての定義を行っておきたい。

鈴木(1997)によれば、強迫現象をはじめて報告したのはEsquirolであり(1838年)、その後「現象」としては様々な形で取り上げられてきたが、その強迫現象を「強迫神経症」という一

疾患単位として取り上げたのはFreud, Sである。

Freudは「性格と肛門愛」(1908)、「強迫神経症の一例に関する考察」(1909)、「強迫神経症の素因」(1913)、「制止・症状・不安」(1926)などの論文において強迫現象をとりあげ、強迫神経症の発症機制を明らかにした。これは今でも強迫症状理解のための重要な貢献とされており、その後の強迫現象をめぐる精神病理学に大きな影響を与えた。

一方で単なる症状の理解にとどまることなく、その基礎にある「強迫性格」とでも呼ぶべきものへの関心が高まり、さらにはその性格の基盤をなす「強迫的スタイル」へと近年の関心は移っている。このスタイルとは、症状や防衛機制がかたちづくられる基礎になるとともに、適応的な諸機能の働き方の基礎になるものであり、神経症発症の素地になる場合から健康な精神機能の特徴を意味する場合までを含むという概念である(岩崎, 1991)。Salzman (1968) が提唱した「強迫パーソナリティ」という概念も、Personalityという用語を用いているがこの「強迫的スタイル」と同様のことを指していると考えられよう。彼が主張したのは、強迫性格を強迫神経症の基礎性格とのみ捉えるのではなく、様々な病態の基礎に共通して存在する性格として広く捉えなおそうということであり、平均人の範疇に見られる強迫的な心性から、強迫神経症を経て、抑うつ、恐怖症、そしていくつかの嗜癖状態へといたる一連の病像を強迫スペクトルと呼んだ。そして「強迫パーソナリティ」とはそのスペクトルの背後にあって基底をなしているものであり、非常に現代的な特徴を備えるものだということを明らかにした。彼は強迫的な心理傾向の本質を次のように定式化している。「強迫的防衛とは、人間に本質的な無力さや頼りなさに対処するため、自己へのコントロールと環境へのコントロールに頼ろうとする試みである。」ここに至って、強迫性が防衛するものは本能的衝動のみならず、無力さや頼りなさといった自己の不確実感に由来する諸側面でもあるという認識がうまれた。青年期はこの衝動および自己不確実感がともに高まる時期であるとも考えられ、それが強迫的心性の増大に寄与していると考えることができよう。

冒頭にはかなり狭い定義を挙げたが、実際の強迫概念は非常に広いものだという臨床家からの指摘は数多い。例えば下坂(1997)はもともと英語の「Obsession」は日常的に「何かにとりつかれている」といった意味合いでも用いられる語であることを挙げ、狭い枠にとらわれずに考えることが臨床の実態にそっているのではないかと述べている。本稿でも狭い枠にとらわれずに、誰もが強迫「的」な部分をそのパーソナリティの一部として備えているという意味合いを含めて、「強迫的心性」という語を用い、青年期に活発化しやすい心性を捉えていくこととする。

3. 青年期病理と強迫的心性

Salzmanを日本に紹介した笠原、成田はそれぞれに、現代の青年患者の性格特徴を考える上で「強迫的心性」に注目することの重要性を主張している。

成田(1993)は、昨今の青年期患者の特徴のひとつとして、彼が「弱力型強迫性格」と名付けた、広義の強迫パーソナリティの増加を挙げている。この性格は、几帳面、完全主義、特有の正義感、清潔好きといった特徴をもち、自己の感情や他者をコントロールしようとする欲求を持つが、古典的強迫性格とは異なり精力性や競争心に乏しく、徹底的にがんばるよりは負ける前に引き下がるといった性格であると説明されている。さらに、この強迫的パーソナリティが脆弱な自己愛を保護していると考えている。古典的な強迫パーソナリティは強迫の殻が甚だ強固で、めっ

たなことでは破れないが、現代の強迫パーソナリティはもう少し脆弱で、しばしば破綻し、一層の病態化や退行へと陥ると成田は言う。この説明より、強迫には防衛的、適応的側面もあることが示されている。この点で一般青年との共通性を論じることができよう。ただ、古典的精神分析理論の知見を振り返ってみれば、特に青年期において強迫的防衛が守るべきものは、自己愛だけではなく、内なる衝動性が外に発露することでもあるという視点を忘れてはならないと考える。

精神分析的な観点から、この「衝動性」と強迫的心性との関わりの方を主に取り上げているのが北山(1982)である。彼は様々な訴えの背後にある強迫性に目を向け、そこに内なる「動物性」との折り合いをめぐる葛藤を見ている。例えば、対人恐怖者は動物性を恥じ、露呈を恐れ、思春期やせ症は動物性を受け入れられないと言うのである。この知見からは、青年がコントロールしようとする衝動は自らの動物性と言えるのかもしれないということを心に留めておきたい。

一方笠原(1991)は、青年期においてよく見られる病態を総括して、登校拒否・思春期やせ症・対人恐怖症・一部の境界状態・若年感情病などには強迫パーソナリティが通底していて、治療と予防は結局ここを戦略目標にしなければならないのではないかと述べている。また、下坂は摂食障害と強迫的心性との関わりをたびたび述べており、笠原同様「共通分母としての強迫パーソナリティの治療の重要性」に言及している(1997)。このように様々な病態のベースにあると考えられている強迫的心性であるが、「強迫スペクトラム」という概念にそって考えるならば、一般的な青年の中にも程度の差はあれこの強迫的心性は存在するものと考えられる。病態にとらわれず、その背後にある心理機制に目を向けることは心理学的に意味あることと思われる。

4. 青年期の発達課題をめぐって ―衝動性とコントロールという観点から―

成田・北山の知見を参考にしながら、前節で紹介した、強迫的心性との関連においてよくとりあげられている病態を検討すると、それらに共通する特徴というのは、衝動性とそのコントロールをめぐる問題と言えるのではないだろうか。例えば強迫的心性との関わりでよく取り上げられる摂食障害という病態は、拒食と過食という病態像をもつ。この2態は対照的なものであるけれども、同一人物の中で交互に見られ得るものである。拒食の相においては患者は北山の言う自己の「動物性」を受け入れられず、それが外界に露呈しないよう強力にコントロールしているものと考えられる。しかしこのコントロールは永遠に続くわけではなく、ある時コントロールをつきやぶって爆発するように動物性が現れるのが過食の相であると考えられる。家庭内暴力を呈する者は、内なる衝動をとても自らの力ではコントロールしきれないことを表現しているようである。しかし彼らも始終暴力を行使しているわけではなく、また暴力を行使するときには必ずしも正当な理由があるわけではない。抑えきれない衝動性をなんとかコントロールしようとは試みているがそれが果たされず、それ故に間歇的な暴力となって現れるのだと考えられようし、暴力表現が「外」ではなされず常に「家庭」においてのみであるというところから、単なる衝動性でかたづけられない、コントロールの問題を抱えていると言えよう。一見衝動性とは無縁のようにも思われる対人恐怖者や登校拒否者などの中には、実は自らの衝動性を強く感じていて、それが露呈しかねないような状況を避けるというコントロール状況を作り出しているようにも思われる者もある。以上のように検討していくと、強迫的心性に関わる病理は衝動性およびそのコントロールの問題を抱えているという点で共通項を持つと考えられる。

ここで精神分析的な発達理論をふりかえってみると、青年期とはそもそも第二次的性徴の発動により幕を開ける時期であり、特に性的な衝動が高まりを見せる（例えば西園，1977）。それだけでなく、筋力も増大するので攻撃衝動も高まると考えられる。そしてこれまでの発達段階と異なるのは、本能的存在でありながら社会的存在としての役割も引き受け、その高まる衝動をコントロールする術を社会の中で身につけていかなければならないということ、その際これまで依存していた親の助けを得ることができない、ということである。このように整理してみると、衝動をコントロールしようとする試みは、自己確立のために自力で奮闘している様子とも思われ、この時期の発達課題の一つであると考えられる。そしてその背後に強迫的な機制が防衛として働くことにより、青年はこの課題を何とか乗り切っていくことができるのだと説明できる。Salzmanをはじめとして言及されている昨今の強迫的心性の高まりは、身体の早熟現象により、衝動に対してそれを抑える自我が比較的弱い状態でたちむかわなければならないために一層の強迫的な防衛を必要とするのだということが、その一因として挙げられる。

さて、内なる衝動のみにとどまらず、自分を取り巻く全てを「コントロール」したいという機制が、強迫的な防衛機制の中でも中心を占めることは従来より指摘されてきた（例えば成田，1986）。そして主なコントロール対象と考えられる衝動性についても、強迫的心性と一見対象をなすようでありながら実は背後に存在するものとして折に触れ言及されてきたように思われる。しかしそのように強迫的心性の大きな特徴とも言える両者の力動に言及した論考はあまりないように思われる。両者は独立に扱われるか、またはコントロール機制は衝動性を抑えているという一方向的な文脈において扱われるかのどちらかなのである。そこで本研究では、衝動性とコントロールの力動に注目するという観点から、強迫的心性の理解を試みることにした。

さて、その実証的な測定についてであるが、参考になるものとして、行動療法の知見に基づき健常者にも見られる強迫傾向を行動的・認知的両側面から抽出する尺度の測定を試みた研究がある（井出ら，1995）。その際強迫傾向を測る尺度の中には「衝動感および行動制御を失うことへの憂慮」を問う項目も含まれていたのだが、分析の結果確定尺度の中には1項目も残されなかった。これは「衝動感」が強迫の傾向と関わりがないのではなく、認知・行動のいずれにも分けられない、またはどちらにも含まれるとも言える内容の項目であるからではないかと考えられる。そこで、本研究では衝動性に関する尺度は強迫的心性を測定する尺度とは独立させて作成することとした。その際、コントロール機制について問う項目も強迫的心性から独立させて問い、衝動性とコントロール機制の各尺度の組み合わせにより、その関係の様式を力動的・多面的に抽出できないかと考えたのである。そしてその関係様式と強迫的心性との関わりを検討することで、青年期における強迫的心性の様相が探索できるのではないかと考える。

II. 目 的

青年期における強迫的心性を測定しうる尺度を作成し、その尺度により青年期に一時的に高まるとされている強迫的心性の様相を一般青年を対象として明らかにする。その際、強迫的心性に密接に関わっていると考えられる衝動性とコントロール機制に関しても別尺度として測定し、衝動性とコントロール機制の力動が強迫的心性とどのように関連しているのか検討する。更に、自

己肯定度を測定し、強迫的心性と適応との関連について検討する。

Ⅲ. 方 法

【調査対象】高校1・2年生187名。そのうち評定尺度項目の回答に不備のあった者を除く、172名を分析の対象とした。平均年齢は16.1歳（range 15-17歳）であった。男女の内訳は、男子73名（平均年齢16.1歳）、女子99名（平均年齢16.1歳）であった。

【調査内容】調査は(1)強迫的心性尺度、(2)衝動性・コントロール機制尺度、(3)自己肯定度尺度、およびTAT図版3枚¹⁾よりなる質問票を授業時間内に各学級ごとに配布し、集団で実施した。

(1)強迫的心性尺度

井出ら（1995）の強迫傾向尺度項目、MMPIの強迫状態尺度項目（1973）および西園（1976）、安永（1979）、成田（1986）らの記述を参考にして、健常者（特に青年期の）にも広くみられる強迫的心性を抽出することを目的とした26項目からなる尺度を筆者が作成した。5件法で評定を求め、強迫性が最も高いと考えられる回答を5点とし、以下順に5点～1点を与えた。

(2)衝動性・コントロール尺度

衝動性とコントロール機制の関係様式を測定するため、全26項目の尺度を筆者が作成した。項目選定にあたっては、井出ら（1995）の尺度原版中には含まれていたが因子分析の結果削除された「衝動性および行動制御を失うことへの憂慮」に関する項目や、強迫的心性を論じた文献の中の衝動性やコントロールにまつわる記述を参考にした。この尺度も5件法で評定を求め、それぞれの性質の最も強い回答を5点とし、以下順に5点～1点を与えた。

(3)自己肯定度尺度

心理的適応感を測定するために、村瀬・村瀬（1966）の自己像尺度より28項目を選び、それぞれの項目の示す内容がどの程度自分にあてはまるかを5件法で評定を求めた。この尺度は「安心している－おびえている」など、反対の意味をあらわす形容詞対からなっており、どちらか一方がpositiveな意味、もう一方がnegativeな意味をはっきり表すようになっている。分析の際は、最もpositiveな回答を5点とし、順に5点～1点を与えた。この尺度の得点が高いほど、自己を肯定的に捉えていると解釈することとする。

Ⅳ. 結果および考察

1. 強迫的心性尺度の検討

この尺度は一元的に強迫的心性を測定する目的で作成されたものであるため、まずG-P分析（25%）を行ったところ、26項目中3項目において0.1%水準で有意差が見られなかった。よってその3項目を削除した上で、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。固有値を検討し、抽出する因子を4因子とした。各項目およびその因子負荷量を表1に示す。

因子1について因子負荷量が高かった項目は、井出らの尺度における「侵入的思考」因子の項目や「呪術的思考」「認識意識の緊張」にまつわるものであった。認識・思考に関する項目であるという点が共通していると考えられたので、因子1を「思考の強迫性」と名付け、9項目から

なる尺度とした。因子2は「確認」に関する項目や、その他には「どんな小さなことでもする前にじっと考えこむ」「計画が急に変更になると落ちつかない」などの項目の因子負荷量が高かった。後から確認するだけではなく常に物事を確実にしたいと望んでいる様子を加味して「確実志向」と名付け、7項目からなる尺度とした。因子3は井出らの「洗浄強迫」因子の3項目が負荷量が高かったが、項目の内容を検討すると必ずしも「洗浄」に言及しているとは言えないと考えられたため「不潔恐怖」と命名し直し、3項目からなる尺度とした。因子4で因子負荷量が高かった3項目では、中途半端なことを嫌い曖昧な状況を排除したいという点が共通していると考えられたので「曖昧排除」と名付け、3項目からなる尺度とした。因子1が思考・認識に関わる項目からなるのに対し、それ以外の因子は何らかの形で行動に関わる項目によって成り立っていると考えられるかもしれない。

各因子ごとの α 係数(Cronbach)は表1に示した通りであり、項目数が少ないことを考えあわせるとまずは信頼できる値であると言えよう。よって、各因子に含まれる項目の得点合計を各因子得点として以後の分析に用いた。また尺度全体の α 係数は0.800であり、尺度としての一元性は高いと考えられたので、各因子得点合計を「強迫的心性得点」として以後の分析に用いた。

各因子得点および強迫的心性得点の性差をt検定によって検討したところ、いずれにおいても有意差は見られなかった。この結果から、以後の分析では男女を分けずに取り扱うこととする。

表1 強迫的心性尺度因子分析結果(主因子法・バリマックス回転後)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
◇思考の強迫性 ($\alpha = .719$)					
ジンスは信じて守るほうだ	.610	-.008	-.105	.047	.385
知らないことがあると不安になる	.541	.322	-.070	.014	.401
気をつけていなければいけないことが多すぎる、と思うことがある	.522	.149	.480	.016	.526
おまじないに頼ることがよくある	.508	-.112	.055	.147	.295
理由もなく、自分が病氣やけがをしているのではないかと心配になることがある	.507	.166	.029	-.069	.290
頭が勝手にものを考えて、自分のまわりで起こっていることに注意が向けられない	.499	.132	.278	-.262	.413
ぼんやりせず、いつも注意力を保っていなければいけないと思うことが多い	.495	.177	.405	.139	.459
ある考えがくりかえし浮かんできて、頭から離れなくなることがよくある	.491	.324	-.120	.034	.362
自分に限界があることを認めたくない	.491	-.107	.035	.206	.296
◇確実志向 ($\alpha = .683$)					
私は物事を確認しすぎだと思う	-.078	.717	-.029	.045	.524
どんな小さなことでも、する前にじっと考えこむ	.234	.606	.207	-.028	.465
何かしたときには、必ず2・3回以上チェックする	-.096	.567	.232	.021	.384
やっても仕方がないと分かっているのに、くりかえしやらないと気がすまないことがある	.355	.496	.178	.043	.405
ドアや、引き出しなどがちゃんとしまっているか、確かめに戻ることがよくある	-.033	.460	.430	-.170	.423
計画が急に変更になると落ちつかない	.268	.446	-.002	.314	.369
物事の原因や理由に疑問が起って、考えずにはいられないことがよくある	.268	.415	-.027	.230	.298
◇不潔恐怖 ($\alpha = .615$)					
誰かが前にさわっていたものにふれるのはいやだと思う	.004	.003	.742	-.076	.556
他人の汗、唾液などに少しでもふれると、服がひどく汚れて、何か体に害があるように感じる	.040	.155	.728	.093	.564
汚いと思うものにさわったら、すぐにきれいにしないと気がすまない	-.032	.065	.586	.108	.360
◇曖昧排除 ($\alpha = .631$)					
中途半端なことは嫌いで、どちらかにはっきり決めたいほうだ	.168	.041	.063	.703	.528
計画を立てることが好きだ	.071	.021	.027	.684	.475
何事もきっちりしていないといやなほうだ	.072	.443	.177	.626	.625
時間通りにできなくて、遅れることが多い	.379	.039	.097	-.471	.377
因子寄与	2.953	2.591	2.292	1.949	
因子寄与率(%)	19.42	8.60	8.34	6.18	

2. 衝動性・コントロール尺度の検討

この尺度は一元性を目的としたものではないため、まず全項目を対象として主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。固有値より因子数は3と解釈するのが最も妥当であると考えられた。各項目およびその因子負荷量を表2に示す。因子1には、「衝動性」と想定していた項目のほかに「自分の感情を抑えられないのではないかと不安になる」などの「行動制御を失うことへの憂慮」と想定していた項目も含まれていた。検討の結果、それらの項目も広い意味で衝動性と考えても差し支えないと判断し、改めて「衝動性」と名付け、12項目からなる尺度とした。因子2は主に「コントロールしたいという欲求」と想定していた項目よりなるが、「自分のしたことに失敗がなかったかどうか気になる方だ」という「コントロールにまつわる不安」を示す項目も1つ高く負荷していた。この項目のもつ、行動を起こす前だけでなく起こした後も状況のコントロールに関心を寄せているという点を考慮し、この因子を「コントロール志向」と命名し、4項目からなる尺度とした。因子3は各項目に共通する行動の慎重さ・抑制的な表出のあり方に注目し、新たに「行動抑制」因子と名付け、3項目からなる尺度とした。

因子の内容について考察しておく。まず「衝動性」因子には、上述したように、「行動制御を失うことへの憂慮」が含まれており、かなり幅広い概念からなる因子であると考えられる。次に「行動抑制」因子についてであるが、この因子はもうひとつ抽出された「コントロール志向」と比較すると、衝動性を行動レベルで先回りして抑えることでコントロールしようという働きをあらわしているのではないかと考えられる。つまり、自らの衝動性をコントロールする方法としては、「コントロール志向」による意識的な統制の努力だけではなく、行動や感情表出をあらかじめ控えることで衝動性が露わになるのを、いわば無意識的にコントロールしようという第2の方法が示されているのではないかと考えたのである。よって最終的に、この3尺度は衝動性と2つのタイプのコントロールのあり方からなるものと位置づけ、以下の分析をすすめた。

各尺度ごとの α 係数は表2に示した通りであり、「コントロール志向」および「行動抑制」尺度も項目数が少ないことを考えあわせるとまずは信頼できる値であると言えよう。よって、各尺度に含まれる項目の得点合計を各尺度得点として以後の分析に用いることとした。各尺度得点の性差をt検定によって検討したところ、コントロール志向得点は男子の方が女子よりも有意に高かった($t=2.677$, $df=170$, $p<.01$)。また衝動性得点においても男子の方が女子より高い傾向がみられた($t=1.861$, $df=170$, $p<.10$)。

この結果をもとに、衝動性とコントロールにまつわる性差について、考察を加えておきたい。衝動性尺度得点が男子においてやや高いという結果は、体力の差などから考えてもうなづけるものであり、一般に言われていることと抵触しない。逆に有意傾向程度の差しか見られなかったとも言えることより、この尺度が女子の衝動性をもう少しとりうる尺度であると考えられるのではないか。コントロール志向尺度も男子において高いという結果が得られたことは、衝動性が強い分意識的な統制の努力を必要とするのだということを示唆しているのかもしれない。しかし衝動性に比べてずいぶん差が大きいことから、それだけでは説明できないようにも思われる。このコントロール志向尺度は良く言えば自己確立に向かう主体的な、悪く言えば自己中心的な特徴を備えた項目であるとも考えられるので、そういった部分での性差なのかもしれない。青年期においては、一般に女子の方が自分を周囲にあわせて行動する傾向が強いと思われるからである。

表2 衝動性・コントロール機制尺度因子分析結果（主因子法・バリマックス回転後）

項 目	F 1	F 2	F 3	共通性
◇衝動性 ($\alpha = .819$)				
自分の感情をおさえられないのではないかと不安になることがある	.723	-.012	.080	.529
考えていることは別の行動を思わずしてしまうことがある	.666	.053	-.157	.471
自分の体が自分の思い通りにならないのではないかと心配になることがある	.646	.018	.024	.419
なぜそんなことをしたのだろうと、後になって自分でも不思議に思うことをやってしまうことがある	.643	.184	-.108	.459
自分自身や他人を傷つけたような気分になることがある	.590	.047	.193	.409
わけのわからない力につきうごかされるようにして行動してしまうことがある	.582	-.260	.053	.409
理由もなく、物を壊したり傷つけたりしたくなるときがある	.536	-.037	-.152	.311
かっとなると自分で自分がおさえられない	.515	-.012	-.361	.396
何か悪いことや、人をびっくりさせるようなことをしたくてたまらなくなることがある	.512	.088	.142	.291
自分の本心を自分の中だけにしまっておけなくなるのではないかと不安になることがある	.504	.042	.180	.308
急に何もかもほうりだしてしまいたくなることがある	.475	.174	-.111	.269
気分が変わりやすい	.457	.260	-.299	.366
◇コントロール志向 ($\alpha = .682$)				
自分で考えたとおりに行動したい	.030	.724	-.204	.566
自分のことはなんでも自分の思い通りに決めたい	.175	.723	-.105	.564
自分の気持ちは自分でコントロールしたいと思う	.051	.713	.186	.567
自分のしたこと失敗がなかったかどうか気になるほうだ	.219	.535	.233	.414
◇行動抑制 ($\alpha = .614$)				
失敗しないよう、慎重に行動するほうである	.014	.135	.695	.435
あまり考えないで、話したり行動したりすることが多い（*：逆転項目）	-.310	-.102	.687	.513
私は自分の感情をあまり出していないと思う	.200	.037	.576	.268
体の調子が悪くなると、放っておかないで、病院に行ったり薬を飲んだりしてすぐに対応する	.197	-.325	-.059	.148
因子寄与	4.245	2.193	1.672	
因子寄与率 (%)	22.02	10.43	8.11	

次に、衝動性およびコントロールの2種のあり方の特徴が、個々の青年のなかにどのような力動関係で存在するかについて検討するため、「衝動性」「コントロール志向」「行動抑制」の3尺度得点を変量として、階層型のクラスター分析（ワード法）を行った。クラスター数をいくつかに変えて分析を試みた結果、クラスター数は4が最適であると判断した。それぞれクラスターA・B・C・Dとする。各クラスターに含まれる人数の性差を χ^2 検定によって検討したところ、クラスターに含まれる人数に性差はないと考えられた（ $\chi^2 = 2.052$, $df = 3$, n.s.）。クラスター別人数は表3に示す。この結果より、衝動性尺度やコントロール志向尺度は単独で見ると性差があるものの、それぞれの力動関係として抽出されたクラスターには性差がないと言えよう。よって、以後の分析ではクラスターを男女混みで扱う。クラスター別のプロフィールを図1²⁾に示す。

各クラスターがどのような特性を持つかを検討するため、4つのクラスターを独立変数、各下位尺度得点を従属変数とする1要因分散分析を行った。表4にTukeyのHSD検定を用いた下位検定（多重比較）結果を示す。衝動性得点に関しては全クラスター間で有意な差が見られた（ $F[3,168] = 418.8$, $p < .01$, $B < A \cdot C \cdot D$, $A < C \cdot D$, $C < D$ ）。コントロール志向に関してはA・DおよびC・D間において有意な差が見られた。（ $F[3,168] = 6.32$, $p < .01$, $A \cdot C < D$ ）。行動抑制に関してはA・BおよびC・B間において有意な差が見られた（ $F[3,168] = 2.73$, $p < .05$, $A \cdot C < B$ ）。

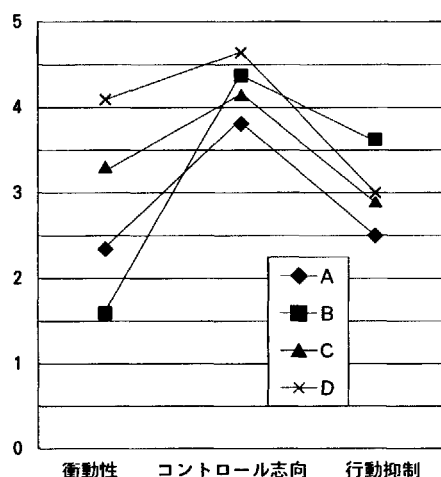


図1 衝動性・コントロール尺度の
クラスター別プロフィール

表3 各クラスター別人数

	A群	B群	C群	D群
男子	20	4	34	15
女子	31	8	47	13
合計	51	12	81	28

表4 衝動性・コントロール尺度分散分析の
多重比較結果

衝動性	$B < A \cdot C \cdot D, A < C \cdot D, C < D$
コントロール志向	$A \cdot C < D$
行動抑制	$A \cdot C < B$

$P < .05$

プロフィールにそって各クラスターの特徴を見ていくと、A群は行動抑制およびコントロール志向がクラスター間で最も低く、衝動性もやや低めであることがわかる。このことから、衝動性がさほど高くないためコントロールの必要性も感じないのびのびした群とも言えるが、コントロール機制が発達していない未成熟さを示しているとも考えられ、それ故に衝動性を認知できていない可能性もある。このコントロールの低さが適応的なものであるかどうかは検討が必要であると思われる。B群は衝動性は最も低いが行動抑制は最も高く、コントロール志向も高めであるという特徴を示している。このあり方は衝動性は低いのにコントロールの必要性を強く感じていること、あるいは強いコントロールによって衝動性を低く抑えていることを示唆している。他群と比べて人数が極端に少ないこともこの群の特徴である。C群はコントロール志向が低いことを特徴とし、衝動性および行動抑制は中間的な値を示している。このことから、ほどほどの衝動性を感じつつも適度に行動を抑制しており、意識的なコントロールの必要性はあまり感じていない群であると考えられる。プロフィールの見せるバランスのよさに加えて、人数が最も多いことから、青年期においては標準的なあり方と言えるかもしれない。D群は衝動性がクラスター間で最も高く、行動抑制は中間的な値であるのに対しコントロール志向は最も高い値を示しているという特徴がある。このことから、衝動性の高さを行動を控えることで抑えることがしきれず、そのため自らをコントロールしようとする志向が高くなっている様子がうかがえる。このタイプは強迫的心性との関連が高いと考えられる。

なお、衝動性およびコントロールの2種のあり方の力動関係として抽出された上記のクラスターが示すものを、以後「衝動・コントロール様式」と呼び、以下の分析で用いることにする。

3. 強迫的心性と衝動・コントロール様式との関連

次に、「衝動・コントロール様式」によって強迫的心性に差がみられるかを検討するため、4クラスターを独立変数、強迫的心性得点および各下位尺度得点を従属変数とする1要因分散分析

を行った。下位検定（多重比較）にはTukeyのHSD検定を用いた。クラスター別の得点平均および標準偏差と検定結果を表5に示す。この分析においては「不潔恐怖」以外の尺度得点において有意な差が見られた。まず強迫的心性得点では、DやCがAに比べて高く、またDがCより高かった（ $F[3,168]=10.17, p<.05, A<C \cdot D, C<D$ ）。「思考の強迫性」は、DがA・B・Cよりも高く、CがAより高かった（ $F[3,168]=15.57, p<.05, A \cdot B \cdot C<D, A<C$ ）。「確実志向」はDやCがAより高かった（ $F[3,168]=5.02, p<.05, A<C \cdot D$ ）。「曖昧排除」は、BがC・A・Dより高かった（ $F[3,168]=3.67, p<.05, C \cdot A \cdot D<B$ ）。

表5 クラスター別の強迫的心性尺度得点平均（標準偏差）および多重比較結果

	A	B	C	D	F値 (df)	多重比較結果
思考の強迫性	26.45 (6.24)	26.17 (6.31)	29.27 (5.41)	35.18 (4.93)	15.57 (3)	$A \cdot B \cdot C<D, A<C$
確実志向	19.04 (4.49)	22.58 (7.51)	21.51 (4.50)	23.07 (5.54)	5.02 (3)	$A<C \cdot D$
不潔恐怖	8.02 (2.43)	9.42 (3.20)	8.51 (2.51)	9.00 (3.15)	1.37 (3)	n.s.
曖昧排除	9.55 (2.36)	12.17 (3.24)	9.80 (2.61)	10.00 (2.71)	3.67 (3)	$C \cdot A \cdot D<B$
強迫的心性得点	63.06 (11.3)	70.33 (15.4)	68.89 (10.4)	77.25 (10.3)	10.17 (3)	$A<C \cdot D, C<D$

$P<.05$

各クラスター別に結果を検討する。衝動性およびコントロールとも低いという特徴を持っていたA群は、全体的に強迫的心性が低いことが示された。衝動性の低さ、コントロールの緩さは強迫的心性を高めないことが示唆されていると言えよう。プロフィールパターンはC群と類似していたが、思考の強迫性がCと比べて低くなっており、クラスターに分けたことの意義が示されているように思われる。衝動性が低くコントロールは高かったB群は、曖昧排除が他のどの群と比べてもそれぞれ有意に高いが、総合すると強迫的心性は高くなかった。これはコントロール志向の強さによって曖昧さを排除できているので、それ以外の強迫的な機制を必要としないためということが考えられる。またB群に関しては、確実志向得点および強迫的心性得点の標準偏差の値が他群と比べて大きいことに注目しておきたい³⁾。確実志向に関してこの群の中でかなりのばらつきがあると考えられ、この点においては個人差が大きい群なのかもしれない。また衝動・コントロール様式が最も標準的な群であると考えられたC群は、確実志向の高さの故に全体的な強迫的心性も比較的高くなっている⁴⁾。ただ強迫的心性に関してもほどよくバランスが取れていると言えそうである。いわゆる標準的な青年であっても、強迫的心性を構成する要素のうち確実志向は高くなりやすい傾向があると推察される。コントロール志向が低いこの群が確実志向が高くなっているのは一見矛盾しているようであるが、コントロール志向という機制を十全に使いきれていないため、確実志向が高まっていると考えられそうである。最後に衝動性・コントロール志向とも高く、前節でも強迫的心性との関連性の高さが推測されていたD群は、やはり思考の強迫性および確実志向が高く、強迫的心性得点も群中最も高くなっており、実際に関連性の強さが示された。この結果は、強迫的心性が高まっている場合、その背後では衝動性・コントロールがともに高まっていることを示唆しているのではないだろうか。

4. 自己肯定度尺度と、強迫的心性および衝動・コントロール様式との関連

自己肯定度尺度についてG-P分析（25％）を行ったところ、0.1％水準で有意差が見られなかつ

た項目が2項目あったため、その2項目を除いた26項目を改めて「自己肯定度尺度」とし、その項目得点合計を「自己肯定度得点」として以後の分析に用いることとした⁵⁾。

強迫的心性の高低と衝動・コントロール様式の違いによって自己肯定度に差が見られるかを検討するために、自己肯定度得点について、強迫的心性（高・低の2群）⁶⁾×衝動・コントロール様式（A・B・C・Dの4群）の2要因分散分析を行ったところ、衝動・コントロール様式の主効果が有意であり、TukeyのHSD検定によって多重比較をおこなったところ、D群における自己肯定度が他の3群それぞれよりも低かった（ $F[3,164]=5.16, D < A \cdot B$ ($p < .01$), $D < C$ ($p < .05$)). 強迫的心性の高群・低群の間には自己肯定度の差は見られなかった。交互作用は見られなかった。クラスター別の自己肯定度得点平均と標準偏差を表6に示す。

表6 クラスター別の自己肯定度得点平均（標準偏差）

	A	B	C	D
自己肯定度	89.33 (12.9)	95.83 (13.9)	87.35 (13.9)	77.42 (22.2)

前節でまとめた各群の特徴も振り返りつつ、この結果を考えてみる。まず、A群についてはこの結果から一応の適応度の強さが認められたと言えよう。この群の自己肯定度の高さは、衝動性が低くコントロールの必要性もあまり感じていない、行動を抑制する必要もないというあり方と関わっているのかもしれない。B群は自己肯定度が最も高かった。この群は強迫的心性の中では「曖昧排除」のみ高かった一群であるが、このことが自己肯定度の高さに反映している可能性が考えられる。曖昧さを排除し行動することが自己の確立に寄与しているためであろうか。C群の肯定度がそれほど高くなかったことはやや意外な結果であったが、低いと言うよりはA、B群のほうが高いと考えるべきであろう。それなりに衝動性やコントロールに関して自分なりに苦勞し、自己の確立に格闘している青年像が浮かび上がるようでもある。D群においては、自己肯定度が低くなっていることが示された。この群は強迫的心性も高くはあったが、強迫的心性高群が必ずしも自己肯定度が低くなるとは言えないという結果を考えあわせると、衝動・コントロール様式のあり方こそが自己評価に関わってくる側面であると考えられる。強迫的心性が低かったA群の結果も考えあわせると、強迫的心性に関しては、低ければそれは自己肯定度を増すことにもつながりうる、しかし高いからといって自己肯定度を下げることにはならない、と言えるだろう。

5. まとめおよび今後の課題

本稿では、青年期における強迫的心性を論ずるにあたって、その背後にあると考えられる衝動性とコントロールの力動に注目してその様相を4群に分類し、各群別の特徴を明らかにしながら考察をすすめてきた。もう一度強迫的心性との関わり、さらにはこの心性をベースにもつ病態理解ならびに援助に向けてという観点から、各群の示す様相を振り返っておきたい。

強迫性との関連が最も高いと考えられたD群の示す諸特徴からは、衝動性およびコントロールが同時に高い場合、強迫的心性は他群よりも高まることが示された。この強迫的心性の高さは、防衛機制としての意味を持っていると考えられる。浜垣（1995）は、衝動性をより前面に出す過食症の治療の中で、強迫性を取り上げられるようになることを治療の一つのターニングポイント

としていると述べているが、この考え方は過食症者にとどまらず、衝動が高いながらも強迫的防衛を使いきれない青年全般に対して有用なのではないだろうか。強迫的心性との関わりを論じる上では、B群のあり方も興味深いものである。曖昧排除の強さ、自己肯定度の強さが印象的であったが、意識的なコントロールを志向しつつ、行動の表出も抑えて、曖昧さを排除して過ごすことで、適応している姿が浮かびあがってきた。人数の少なさがこの群の特殊性を示しているとも言え、少数例という観点から考えれば、この群のより詳細な検討も強迫的な心性と関わる病態理解に寄与するものと考えられる。A群の示す特徴からは、衝動性やコントロールが全般的に低いことは適応感と結びついていると考えられたが、やや幼児的な段階にとどまっているとも言え、発達課題としての自己確立をめぐる葛藤を経験しているという点には疑問が残る。ただ、強迫的心性は最も低いものであり、病態理解のためには反対の極として捉えてみることで意義をもつことがあるかもしれない。C群は様々な面で最も標準な群と考えられ、衝動性やコントロール志向をそれなりに感じながら、適度な強迫的機制を働かせることによって適応しようとしている様子が見えてきた。このC群から強く感じさせられたのは、確実志向の高さにあらわれているように、標準的な群にあっても青年期には確実なものを求めようとする心性が高まるのだということである。そのような事態を理解した上で、ことさらに不確実感を刺激するような言動をしないことは、青年に接する上で重要なことのように思われる。

今回取り上げた衝動・コントロール様式において、群別の心性の違いがある程度取り出せたことは、この衝動・コントロール様式という概念の有効性を示しているように思われる。ただ、今回は「衝動性」という概念を考えるのに強迫的心性の側面というところから出発したため、ここで扱われた衝動を厳密に定義できてはいない。「衝動性」というのは幅広い概念であり、また日常的にも使用するので便利な語ではあるが、より厳密な定義が今後は必要である。また、コントロールの様態としては2種のあり方を考えた。その働きの違いという点では必ずしも差異が明らかにできたとは言えないが、普通コントロールと聞いて思い浮かべる意識的なコントロールとは別に新たに抽出された、行動抑制というあらかじめ行動表出を抑えるというコントロールのあり方は、I-4で述べた、対人恐怖者や登校拒否者にみられる衝動性とコントロールの問題のあり方と関連していると考えられ、今後コントロールの問題を考えていく上で重要な視点になりうると思われる。衝動性・コントロールとも、概念を厳密に検討し、より妥当性の高い尺度を作成することで、衝動・コントロール様式のもつ意義はさらに高まるように思われる。

付 記

本論文は、京都大学大学院教育学研究科に提出した1998年度修士論文の一部に加筆、修正したものである。

注

- 1) TATに関する分析は、上記修士論文において論じたが、紙面の都合上本稿では扱わない。
- 2) 得点は各尺度得点のクラスター別平均を項目数で割ったものである。
- 3) このためか、平均値の高さ通りには有意性が示されていない(表5参照)。
- 4) 強迫的心性得点の多重比較結果により $A < C$ が示されていることを、このように表現した。
- 5) 上記修士論文においては、自己肯定度尺度も因子分析を行い、下位尺度を用いた詳細な検討を行ったが、紙面の都合上本稿では省略する。

6) 強迫的心性尺度得点の平均値により、被検者全員を高群(84名)・低群(88名)の2群に分けた。

引用文献

- Freud, S (1908) 懸田訳 性格と肛門愛 フロイト著作集5 人文書院
Freud, S (1909) 小此木訳 強迫神経症の一例に関する考察 フロイト選集16 日本教文社
Freud, S (1913) 井村ほか訳 強迫神経症の素因 フロイト選集10 日本教文社
Freud, S (1926) 井村訳 制止・症状・不安 フロイト著作集1 人文書院
浜垣誠司(1995) 過食の精神病理に関する一考察 -強迫と解離の弁証法- 精神神経学雑誌
97(1) 1-30
井出正明・細羽竜也・西村良二・生和秀敏(1995) 強迫傾向尺度構成の試み 広島大学総合科学部紀
要IV 21 171-182
岩崎徹也(1991) 青年期の強迫をめぐって -精神分析の立場から- 思春期青年期精神医学
1(2) 128-137
笠原 嘉(1991) 青年期の発達とその精神病理 思春期青年期精神医学 1(1) 39-42
北山 修(1982) <この国>における父と母の位置づけ 馬場謙一編 青年期の精神療法
金剛出版 所収
村瀬孝雄・村瀬嘉代子(1966) 自己像尺度作成の試み 臨床心理学の進歩 誠信書房 178-186
成田善弘(1986) 強迫症の病理と治療 精神研ケース研究第3号 東京都精神医学総合研究所
成田善弘(1993) 思春期・青年期の精神病理-昨今の特徴 第4回嗜癖行動学会特別講演
成田善弘 強迫症の臨床研究 金剛出版 所収
日本MMP I研究会 編(1973) 日本版MMP Iハンドブック 三京房
西園昌久(1976) 強迫の意味するもの 精神分析研究 21(4) 180-186
西園昌久(1977) 対人関係論 精神医学 19(12) 1224-1240
Salzman, L (1968) The Obsessive Personality Jason Aronson 笠原 嘉・成田善弘 訳
強迫パーソナリティー みすず書房
下坂幸三(1997) 摂食障害と強迫 牛島定信編 強迫の精神病理と治療 金剛出版 所収
鈴木國文(1997) フランス精神医学に見る強迫 牛島定信編 強迫の精神病理と治療
金剛出版 所収
安永 浩(1979) 分裂病の辺縁領域(その2) -強迫型意識と感情型意識- 分裂病の精神病理8
東京大学出版会

(博士後期課程3回生, 心理臨床学講座)